

特別研究員研究発表要旨

三信について

井上 恵 樹

本願の三信が、欲生・信楽・至心・名号と、体が次第して表わされることを考えてみたい。

欲生心、我が国に生れよと叫ぶ心は、本願の根源心である。その事は、二河譬に於て「弥陀の願意」が「招喚」の上にのみ譬えられている如くである。如来の正覚が十方衆生をこそ内に負荷する本願である限り、その意欲は「我当哀愍度脱一切十方来生心悦清淨 已到我国快樂安穩」と、我国招喚の形をとる。法蔵菩薩が二百一十億諸仏刹土の悉見の只中から無上殊勝の願を超発し、本願酬報の報土を成就することは、衆生を苦勵して正覚を自ら開かしめんが為でなく、願土に喚うて正覚を与えんが為である。そこに凡夫が、如来と等しくなる凡夫宗教の根本性格が在り、それを直ちに語るものこそ欲生の叫びである。『自己とは何ぞや』と問わねばおられぬ衆生「存在」の深淵は、その「存在」が安立して「在」ることのできる土（国土）ありて始めて自体満足することができる。その土に喚う心こそ欲生である。だから「若くは不生者不取正覚」と、招喚にこそ如来正覚の全てがかけられるのである。

だからこそ衆生に回施せられる三信は、欲生を最後とし根源とする。三信仏意釈にあふれる法蔵の永劫修行こそ、「已に我が国に致らば快樂安穩な」らしめんが為の忍終不悔なる諸苦毒中我行精進であった。欲生の悲叫であった。至誠心たれということも、深信せよということも、そして衆生海に如来の至心として名号を已に回施し給うということも、本願を信ずる信自体を已に信樂として回向成就し給うということも、衆生は底に「我が国に生れんと欲え」という本願の限りなき悲叫を聞き取るによりて始めて挙身に領づきうるのである。欲生の悲心なくば回向も生命がない。回向せられた名号、信心を正しく回向する根本心こそ欲生である。「欲生即是回向心、斯則大悲心」（欲生心釈）とはこれである。思うに欲生心成就文には唯除の文が付してあるのであるが、その唯除こそ本願の悲心の躍動であることを思うとき、生れんと欲えとの悲叫こそが、正しく衆生の五逆謗法の只中に限りなく批判純化しゆく大用の根源力であり、衆生摂化の源泉の力であることを知らされるのである。

欲生が群生海を喚うて止まぬ如来根源の悲心であれば、かくして、では、正しく凡夫に与えられた至上の課題は、その本願の「生れんと欲え」という叫びに正しく遇うて、「生れんと願う」心をもつて感応してゆくことであり、その願生心をもつて悲願の生起本末を竊に窺わしめられることである。欲生心に呼応する願生心の中に、「遇うて虚しく過ぐることなき」「仏の本願力」に「遇うてそれを「観知」することである。そのことは、願力を心に思いうかべみるといふ、「信」の課題に外ならない。本願が「設我

得仏十方衆生」と誓われる限り、十方衆生海によりて感応せられねばならぬ根源的性格をもつ。親鸞は字訓釈に於て、欲生心は既に「願楽覚知之心」であることを示された。本願が自らの内景を覚知せずにはおかぬ内面の用きを具して、欲生心なのである。その限り欲生心は、如来の招喚の叫びを衆生の上に覚知せしめる用きを内に具して止まぬ如き招喚の叫びである。欲生心は、衆生が本願の「乗我願力」という叫びを「観」じ「聞」くものでありつつ本願の生起本末を「知」り「思」いゆくことに深まることとして、衆生海に用らいてくる。ここに群生海は欲生の悲心をきいて信心歓喜し正定聚に住し得るのである。「我國に生れしめん」とする本願の根源心が内に本願の生起本末そのものを明らかにせんと自ら意欲し、而してその意欲が正しく衆生の上に「本願の生起本末を聞きて疑いなき聞思」、「願力を心に思いうかべみて知る観知」となる。如来欲生心によりて呼び起された衆生の清淨願往生心が「無上信心金剛真心」（愚禿抄）という、信の課題を發起するのである。正しく衆生の信の問題が本願欲生心から必然する。このように欲生心が衆生海に必流せねばならぬことを本願の言葉でいえば、欲生が本願の信樂となりて等流する（体とする）というのである。「信の一念は信樂開發の時剋の極促、广大難思の慶心」と親鸞は教えるが、誠に衆生が現にうける信こそ、欲生心という如来界の根本悲心が、不可思議にもその悲心そのものの用らきによりて衆生海に思念（開發）せしめられるという、そういう慶心である。換言すれば、衆生を限りなく超えた難思議の世界が従如来生し衆生を喚うて衆生の間思界にその内景を表現してくる

のである。

このように欲生心は信樂（覚知の心）に等流する。そのような本願の背景を具するものであればこそ、衆生の信は「真実心・大慶喜心」であり得る。苦障の凡夫をこそ喚うて止まぬ本願を聞思して、煩惱に障りを感じぬ如来真実を大慶喜する心だからである。しかして又、信は「金剛心・願作仏心」であり得る。無漏の仏心の「我が大会衆に生れよ」との悲叫を限りなく覚知してゆく心であるからである。そして又、信は「衆生を攝取して安樂淨土に生れしむる度衆生心」であり得る。衆生を攝取して度さんとする本願欲生の叫びを観知するところに、その仏心を、一切衆生の利他行の純粹成就として仰ぐ心であるからである。そして更には、如上の消息に自利々他満足して遂に「大菩提心」たり得るのである。ここに信樂は、正しく如来欲生の悲心の衆生海への成就であると云い得ようか。

信樂は、欲生心より生れて、欲生悲心の不可思議なる成就である。しかしながらそれは、いずれの行も及び難き凡夫の上に無上の法を説く事業であるのであり、最難事と言わねばならない。それ故、信は「極難信」と云われねばならない。この如き信樂は欲生の成就として等流する本願は、ではこの実現の底に無際を尽す如き御苦勞の積重を修するのであると思う。ここに「諸苦毒中我行精進忍終不悔」して永劫に群生海の底に修行する法藏菩薩の御苦勞がある。だから、信樂という欲生の成就は、ここにその実現の奥底に修されつつある如来因位の永劫修行を内に照し出してこねばならない。信樂という成就・実現は、その実現への久遠の内

面永劫修行を、信樂、覚知の心のその只中に覚知せられるものとして明らかにしてこねばならない。そしてその永劫修行を不虛作なる本願の現動としてこねばならない。ここに至心の課題があると思うのであり、信樂から至心が体として開かれてくる意味があると思う。誠に至心積は法蔵永劫修行にあふれているのである。以下は別の機会に述べたい。ただ最後の名号については、至心の永劫修行によりて成ぜられつつ、本願の名告りとして、如上の欲生↓信樂↓至心という本願の、自体満足の構造全体を衆生海の只中に回向表現してくるものであると思う。

ソクラテスの知

算 武

「無知の知」といわれるソクラテスの知がどのような性質のものであり、またどのような働きをもつものであるかを、プラトンの『弁明』を拠典として考えてみたい。というのは、この無知の知に基づくソクラテスの自他の吟味こそが、アテナイの人々の間に、ソクラテスに対する中傷や敵意をひき起こし、そしてついにはソクラテスを告発し死罪に至らしめたものだからである。

ソクラテスは「自分に知者^{ソポス}という名前と中傷とを作ったもの」を説明して、「わたしがこの名前をもっているのは或る知恵^{ソフィア}によってにほかなりません。……そうしてその知恵とは恐らく人間的知恵^{ソフィア}でしよう、実際この知恵に関してわたしは知者であるらしい

から」(80a)と言っている。ところでソクラテスにこの知恵を自覚せしめたのはデルポイの神託であった。すなわち、「ソクラテス以上の知者はいない」というこのデルポイの神の言葉を苦心しながらも理解してゆく過程でソクラテスが見出した知であった。つまり「大事においても小事においても知者ではないと自覚している」(80c)ソクラテスは、世に知者だと思われ自らもそのように確信している人々——政治家、詩人、制作者等を実際に吟味してみることによって、「ソクラテス以上の知者はいない」というこの神^{ソフィア}勅を反駁しようとしたのであった。このことは、神に虚言者という名を与えるのではなく、むしろ神は決して虚言しないと確信するソクラテスがその神の言葉を理解するための唯一の方法だったのである。そして吟味の結果、判明したことは、「この人は、他の多くの人々にもまた特に自分にも知者であると思われるが、実はそうではない」(80c)ということであった。すなわち、「わたしたちのどちらにも美^カ而善^ガなる事は何も知っていないらしい。しかるにこの人は、知っていないのに何かを知っていると思っており、わたしは実際知っていないままにまた知っていると思ってもいいない。したがって、わたしが知っていないことを知っていると知ってもいいないという正にこの小さな点で、わたしはこの人より知者であるらしい。」(81c)。このような探究をくり返し重ねた末、ソクラテスがデルポイの神の言葉から理解したのは次のことであった。「神こそ真に知者なのでしょう。そしてこの神託において言っているのは、人間的知恵はほんの僅かの価値しかないか、あるいはむしろ全く無価値である、ということな